

2018年7月  
1144号

# 万葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5

(一冊の会研究室)

## 自分にできることから始めよう

～相馬雪香さん没後10年の集い～

7月28日、異例の進路を描いた台風12号が近づく中、憲政記念館会議室において尾崎行雄記念財団による「相馬雪香さん没後10年の集い」が開催されました。憲政の父と呼ばれた尾崎行雄の三女であり、一冊の会永久最高顧問である相馬雪香先生は、1912年にお生まれになり、2008年11月にご逝去されました。今年の11月でお亡くなりになってちょうど10年。その遺志を引き継ぎ積極的に活動している団体として一冊の会にお声がかかり、大槻会長と小山副会長が発表を致しました。



最初に「平和への行動・未来への情熱」ダイジェストDVDが上映されました。中でも、2007年相馬先生95歳の時のインタビュー映像のお姿とお声には迫力があり、まるで目の前でお話されているかのようでした。

最初に難民を助ける会理事長 長有紀枝氏が「難民を助ける会の取り組みと、相馬さんから学んだこと」を話されました。相馬先生はカナダの友人から、難民を受け入れない日本は恥ずべき国だ、と言われたことに奮起し、1979年にインドシナ難民を助ける会を設立。その後「難民を助ける会」として現在は15カ国で活動を展開中とのことで、活動のご紹介がありました。また、相馬先生が幼少の頃に父がおらず寂しい旨のことを母のテオドラさんに言ったところ「お父さんはrighteousness(正義・公正・正直さ)のために働いている」とおっしゃったエピソードを伺ったことがあるとのこと。相馬先生は「誰が正しいかではなく何が正しいか」とおっしゃっていましたが、お母様の言葉を生涯大切に思われていたのかもしれない。

次に、一冊の会大槻会長と小山副会長が交代で「一冊の会の取り組みと、FAWA国際会議、相馬さんとの思い出」を発表いたしました。一部抜粋してご報告いたします。

相馬雪香先生が1982年に市川房枝先生の追悼文を寄稿しておられ、その文面が素晴らしくて感動致しました。それから先生に強く惹かれ是非お会いしたいと心に秘めておりました。数年後“三婆の会”でお会いするチャンスがあり、早速手を上げて質問しました。先生は「面白い事を言うね。貴女と少し話をしよう」とおっしゃいました。私は「小さな事ですが、日本の女性が、歴史上初めて参政権を得ました。その一票を投じた時のアンケート調査をしたいのです！」と意気込んでお話しをすると先生は「それは大きな事だよ！そんな事出来るのかね。対象は全国だよ。しかも約50年も前の事、72歳を過ぎた女性が憶えているかね。」と言われました。私は「本気です。絶対にやり遂げます。本気も本気、本気っ子です！10年前から我が家を会場にして“人権読み合わせ勉強会”を重ね、やる気のある人が少しずつ育っています。」と、決意を述べました。先生はジーと私を見つめて「自分で考え行動することは大切。それを実行しようとする意気込みは、たいしたもの。完成を楽しみにしているね！」と温かく、大きく包んで下さいました。私は理解者が出来たことに感激し、小さな体の先生が入道雲のように大きく見えました。「やり抜きます」と大声でお返事をしました。

それから692名、団体参加6グループ学校参加45校の総合力で全国調査が完成し、『1946.4.10初の女性参政権行使と日本女性自立への出発』という一冊の本にまとめ、それが嬉しい事に荣誉ある「市川房枝基金」を受賞することが出来ました。この報告に先生は大変喜ばれ、本の制作にあたって“女性の特性こそ社会変革の力”と題して寄稿文を寄せて下さいました。本当に、本当に、有りがたい事で御座います。先生は冊子『万葉』創刊にあたり『「平和と人権」の草の根ネット「一冊の会」』と書いてくださり、それからずっと私たちの活動を見守って下さいました。

先生が亡くなる一年程前、軽井沢のご自宅に伺った時、急にポツリと「雪子さんには大変迷惑をかけた」とおっしゃいました。私達は、お嫁さんのお名前が雪子さんだとはその時まで知りませんでした。先生は「私は相馬藩に嫁いだ人間なのに、福島の相馬にはあまり足を運んでいない、何かあったら私に変わって頼むね。」のお言葉に、2人顔を見合

わせて思わず「はい」と大きな声でお返事を致しました。その時は事の重大さには気が付きませんでした。先生からの信頼が身に余るもの、出来る事はやろうと決意しました。

それから時がたち 2011 年 3 月 11 日、東日本大震災がおき津波が発生。原発事故も伴いついてない未曾有の大災害となりました。相馬藩は福島第一原発により南相馬から南側は全地域避難を余儀なくされていました。テレビで知った私たちは、夢中で相馬市に駆けつけました。現状はすさまじく、地獄そのものです。自衛隊のおかげで現地に入る事ができ、破壊され雪が積もった道を走り続けました。大きな船が町の中に押し上げられ、高いビルの屋上には、自動車が乗ってありました。まず、生き延びるための日用品を全国から集め、自動車一杯積んで運びました。被災者からの「大殿は？若殿は？」の質問に、明治の廃藩置県から 140 年経っているとはいえ相馬藩の絆の強さを知りました。先生の“困った時は、お互いさま”のスローガンが私達の活動の背中を押しました。標識も電柱も倒れ、走っても、走っても、果てしなく続く被災地は、地域の区切りがありません。沿岸被災地に沿って北上すると、気が付いたら、青森県の八戸まで支援をしていました。この時の様子は、尾崎行雄記念財団発行の「世界と議会」2011 年 6・7 月号に“すぐやる課の奮闘記”として紹介して下さっております。7 年半たった現在、125 回東北被災地支援をしました。その間、尾崎行雄記念財団を代表して石田尊昭理事・事務局長も度々共に現地に行って、被災者に心を寄せて下さいました。

震災の支援はその時々に応じた活動では有りますが、今日まで持続している事は、「復興祈念樹」の植樹です。木の名前は「雪香プロスペローニア」、条件が良いと 5 年で、直径 30 cm に成長する桐の木（早生桐）です。生涯現役で社会貢献活動に尽力した、相馬雪香先生の名前を冠にしました。タンザニア大使公邸に植えていただき、すくすく育つことが実証済みの桐を、2011 年 5 月相馬市を皮切りに植樹を開始しました。

今年の 7 月 11 日には、岩手県釜石市で復興のシンボルともなる幼稚園・小学校・中学校の正門の前に植樹して参りました。アフリカのレソト王国、尾崎行雄記念財団の支援も頂き、これで植樹は 9 か所目。福島県・宮城県・岩手県・青森県と全被災地に平等に植える事が出来ました。植樹には、地元の市長・教育長・校長や 21 世を担う子ども達、そして復興を願う地元の人達が参加して下さいました。樹を植える事は、生命を育む事になります。また人材育成に通じる面もあります。社会のために、未来のために、力ある人材に育てて欲しい。願いを込めて、植樹活動しております。

最後に FAWA (Federation of Asia-Pacific Women's Associations アジア太平洋女性連盟) についてお話いたします。第 2 次世界大戦が終わって間もない 1950 年、スイスで開催された国際会議に出席した相馬先生は、フィリピンの女性国会議員ペクソン女史と出会いました。そこで「アジア・太平洋地域の女性の連帯の必要性」について語り合い、アジア婦人連盟を作ろう！と各国に呼び掛け、1959 年に 12 ヶ国の女性団体で設立されたのが FAWA です。勇気と知恵をふりしぼり、各国の女性リーダーと友情を結び語り合って実現したと、先生から教えて頂きました。それから今日に至るまで、加盟国が持ち回りで 2~3 年毎に会議を開いてきました。当初 FAWA は規約により一国 2 団体までの有識者で構成されておりました。2007 年、東京で開催された FAWA 会議で名誉副会長を務められた先生の提案により、庶民の集まりであるグループも参加しました。その際、先生の要請で一冊の会は実行委員の団体として会議の運営に当たりました。この会議を契機に雪香先生からバトンを受け取り、一冊の会は日本代表団として、台湾・グアム・韓国・シンガポール総会と出席を重ねて参りました。今年は創設の地フィリピンが主催国です。しかも 60 周年という節目の年でもあります。相馬雪香先生とペクソン女史の厚い契で結ばれ創設された FAWA。FAWA には国際交流の原点があります。女性の連帯を通し、確かなる未来の平和への道を紡いで参りたいと思います。そして、皆さん！その次は私達日本が、開催国の予定です。先生の遺志を継いで、今日お集まりの皆さんと共に大成功を誓い合いたいと思います。

そしてこの場をお借りして、一冊の会の活動の 1 つである、文房具の贈呈をいたしました。今回は大妻中野中学校・高等学校の生徒さんが代表し、レソト王国大使館の藤江通商担当官に直接手渡しました。

最後に、石田尾崎財団理事・事務局長が「罎堂塾の取り組みと、相馬さんの心の力」についてお話されました。リーダー育成を目的に相馬先生と共に立ち上げた罎堂塾。それを提案した時、先生は「本気で考えているなら少なくとも 3 年やらなければ嘘ですよ。3 年持たなかったら本気でなかったということです」とおっしゃったそうです。また、相馬先生の 4 つの心、「本気の心」「純粋の心」「利他の心」「感謝の心」についてお話され、当たり前のことは忘れがちになる、出来ることから始めていくことを誓い合う日にしましょう、と呼びかけました。



後半は立食で飲み物とお菓子を食べながらの交流会。相馬先生の娘さんである原不二子さんが乾杯のご挨拶をされました。私は先生にお会いしたことがありませんが、ビデオ映像と皆さんの思い出をお聞きしているうちに、まるでそこに先生がいらっしゃるようなイメージが描けてまいりました。お会いしたことがある櫻華塾雪グループの中本さんはなおさらでしょう。「改めて、文句を言うのではなく思ったら行動することが大事だと思った」と言っていました。自分にできることから始める、簡単なようで難しいことを、相馬先生のお写真と共に胸に刻み実践してまいります。

文責：赤田研究員 記録：平間研究員